

## 特別寄稿

# 助産師のコア・コンピテンシー＜倫理的感応力＞ —人間の誕生に携わる助産師のなりわい生命の意味からの問い—

Core Midwife Competency <Ethical sensitivity>: Questions About the  
Meaning of Life from the Perspective of a Midwife who Attends Childbirth

キーワード：助産師, コア・コンピテンシー, 倫理的感応力

Keywords: Midwife, Core Competency, Ethical sensitivity

松村 恵子

関西看護医療大学大学院 看護学研究科 母性看護・助産学分野

Keiko Matsumura

Kansai University of Nursing and Health Sciences, Graduate school of Maternal Nursing and Midwifery

## I 助産師のコア・コンピテンシー＜倫理的感応力＞問いのはじまり

助産師の定義と理念について表1に示した。この定義と理念を具現する助産師のコア・コンピテンシーは、日本の助産師に求められる必須の実践能力であり＜倫理的感応力＞・＜マタニティケア能力＞・＜ウィメンズヘルスケア能力＞・＜専門的自律能力＞という4つの要素から構成される。これらの要素は表2に示した「助産師の倫理綱領」および「助産師の役割・責務」に関する実践内容を反映する。＜倫理的感応力＞についての解説<sup>1)</sup>では『助産師は、対象一人ひとりを尊重し、そのニーズに対して倫理的に応答する』としている。助産師は、対象となる一人ひとりの女性と子どもおよび家族を尊重し、敬愛と信頼に基づく相互関係を基盤として活動することによって、生命の尊重・自然性の尊重・智の尊重という助産師の基本理念を、行動として具現化する専門職である。そのために助産師には、対象となる女性と子どもおよび家族の生命や人間としての尊厳と権利を最大限に尊重するために相手のニーズを的確にくみ取り反応する能力、女性と子どもおよび家族との間に信頼関係を築きつつ平等で最善のケアを提供する能力、女性と子どもおよび家族に関する情報の保護を徹底しケア対象者のプライバシーを守る能力が求められている』としている（公益社団法人

日本助産師会 助産師のコア・コンピテンシー2021）。

この助産師に求められる実践能力＜倫理的感応力＞は5つの要素で構成され、①知ること、②共にいること、③誰かのために行うこと、④可能にする力を持つこと、⑤信念を維持することについて一般目標、行動目標、評価時期が明記<sup>2)</sup>されている（公益社団法人 日本看護協会 新卒助産師研修ガイドp38,2012. 助産実践能力習熟段階[クリニカルラダー]活用ガイドp36,2022）。＜倫理的感応力＞について広辞苑(2018)で<sup>3)</sup>調べてみると、倫理的と感応力が熟語の＜倫理的感応力＞という用語は見当たらない。国内の学術論文を探しても＜倫理的感応力＞という用語を用いた研究論文は見当たらない。広辞苑(2018)では<sup>3)</sup> 倫理的とは「倫理の法則に従うさま」とあり、感応とは「心に感じこたえること」とある。また『感応道交』という用語が示されており「直接の接触はないものの間に反応が起こり通じ合うこと等」とある。他の哲学辞典、心理学辞典、倫理学辞典、社会学辞典等々、関係すると考えられる辞典で探しても見当たらない。唯一、「感応力」という用語が記述されていたのは、司馬遼太郎(2003)の歴史小説「峠」<sup>4)</sup>において、継之助が佐吉に語る『だから心をつねに曇らさずに保っておくと、物事がよくみえる。学問とはなにか。心を澄ませ感応力

を鋭敏にする道である』という文脈である。これは、司馬遼太郎が「陽明学」から解釈し用いたとされている。類語と捉えてよいかどうか課題があるがブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 では、「精神感応能 (mentl telepathy)」テレパシー、思念伝達、読心術ともいう。人間の存在、精神や思考の内容、行動が、通常の感覚的経路を介した合理的な通信手段によらずに、他の人間に伝わる。精神的心霊現象の一種で、超能力とも呼ばれる。念力、透視、予知などとともに、心理学の研究対象となっている。(→超感覚的知覚)と説明する記載<sup>5)</sup>がある。

これらのことから、本論では、「倫理的感応力とは、人倫のみちであり助産師として踏み行うべきこと、助産実践において心に感じこたえる力」とし問いをはじめる。この感応力は、人間の主観的な感じ方や思い考え言動が生起され、産まれ生きるという生涯に汲み込まれているように思われる。今日の周産期医療・母子保健分野における動向や課題への取り組みなど、現代社会で起こっている様々な「いのち」の現象についてなお一層、一人ひとりの心と対峙する助産師の＜倫理的感応力＞が、今あらためて問われている時代のように思う。この思いをひきつれながら、次に、いのちの誕生と生命の意味について述べる。

表1 助産師の定義と理念

## I・助産師の定義

助産師とは、法に定められた所定の課程を修了し、助産師国家試験に合格して、助産師籍に登録し、業務に従事するための免許を法的に取得した者である。助産師は、女性の妊娠、分娩、産褥の各期において、自らの専門的な判断と技術に基づき必要なケアを行う。すなわち助産師は、助産過程に基づき、分娩介助ならびに妊産褥婦および新生児・乳幼児のケアを行う。これらのケアには予防的措置や異常の早期発見、医学的措置を得ることなど、必要に応じた救急処置の実施が含まれる。

さらに、助産師は母子のみならず、女性の生涯における性と生殖にかかわる健康相談や教育活動を通して家族や地域社会に広く貢献する。その活動は育児やウィメンズ・ヘルスケア活動を包含する。助産師は、病院、診療所、助産所、市町村保健センター、自宅、教育、研究機関、行政機関、母子福祉施設、その他の助産業務を必要とするサービスの場で業務を行うことができる。

## II・助産師の理念

1. 生命の尊重人間の生命には、各人の限りある生命と、親から子、子から孫へと受け継がれる生命がある。助産師は、女性とそのパートナーの生命、生まれ来る子どもの生命、そして子どもが親になることへの萌芽に関与する。人間の生命にかかわる助産師は、その根底において、人間を愛し生命を尊ぶ者である。女性と子どもの生命の尊重とともに、その生命を支える他者の生命への畏敬、そして生命にかかわることの責任感を片時も忘れない。さらに生命の意味を探索し続け、これに寄与することに最大限の努力を惜しまない。以上の信念を行動で示すことのできる者が助産師である。

2. 自然性の尊重助産師は、自然性を尊重する。助産にとっての自然性とは、科学・技術の進歩に伴って生じた人為的介入に相対する概念である。自然性を尊重した助産とは人が本来もつ生理的・精神心理的機能を尊重し、専門的知識や経験、人的・物的資源、身体的・心理社会的サポートなどを活用しながら女性と子どもおよび家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮させる行為である。その行為の結果、健康を維持・増進することである。健康な生理現象において人為的介入が許されるのは、自然性が損なわれず、自然との調和を保ちうる場合であり、助産においても例外ではない。

3. 智の尊重助産師の活動の対象となる人間や環境および生命現象に対して、専門的立場から寄せる知的好奇心、関心を「智の尊重」という。智とは、感性と知性をつなぐものであり、物事を理解し、是非や善悪を判断する心の働きである。生命の意味を追求し、自然性に目を向ける助産師にとって必要なのは、感性と知性の統合である。本来、両者は2つに分けられるべきものではなく、互いに関係しあい、高めあうものである。助産師が、何かに失敗したと感じたり、自信を失いかけていたりしたときにも、この智の尊重の精神があれば、新たな道を創造する勇氣と情熱をもつことができる。知性には、経験的知識と科学的知識が存在する。経験的知識は、女性と子どもおよび家族と直接かわり、的確な技術を身につけることによって蓄積される。科学的知識は、学問や研究を通して得られ、両者は相互に関連し統合されて、助産師の感性を高める。それは、助産師全体の専門性の進歩と水準の向上に寄与する。この知性は、女性と子どもおよび家族の利益にも大きく影響する。

公益社団法人 日本助産師会 ホームページ掲載内容(2022年11月現在)より表1の作成  
<https://www.midwife.or.jp/midwife/competency.html>(参照2022年11月24日)

表2 助産師の倫理綱領と役割・責務

**I・助産師の倫理綱領**

助産師が関与するすべての活動、すなわち助産師の実践、教育、研究の統一として、以下の倫理綱領を宣言する。この倫理綱領は、生命の尊重・自然性の尊・智の尊重という助産師の理念を行動として具体化するにあたり、助産師が遵守しなければならない道徳的な義務を示すものである。この綱領をもって助産師は対象となるすべての女性と子どもおよび家族を尊重し、敬愛と信頼に基づく相互関係を基盤として活動することを、広く一般社会の人びとに向けて宣誓する。

**II・助産師の役割・責務**

1. 妊娠期、分娩期、産褥期、乳幼児期のケアにおける役割・責務助産師は、妊娠期、分娩期、産褥期、乳幼児期における、母子および家族のケアの専門家である。よって、全期を通じて母子および家族に必要なケアを提供する。自己の責任のもとに正常な分娩を介助し、新生児および乳幼児のケアを行う。支援にあたっては、女性の意思や要望を反映できるように、支援計画・実施・評価を行い、ケアの向上に努める。また、異常の発生や異常徴候の出現時を速やかに予測・発見し医師や他の専門職と協働してケアを行う。
2. ウィメンズヘルスにおける役割・責務助産師は、女性の健康の保持・増進を促し、女性が自己の健康管理を行えるよう日常生活上のケアを通して支援する。具体的には、リプロダクティブヘルス／ライツの視点から、女性のライフステージに対応した課題において、健康教育、知識の普及・啓発、健康相談、保健指導を行い、健康をめぐるさまざまな問題に女性が対処できるよう支援する。
3. 助産管理における役割・責務助産師は専門職者として、実践領域で管理業務を行う。具体的には施設を自ら経営し、または経営管理に参画して、緊急時の適切な対応や医療事故防止に努め、質の高い助産ケアを提供し、保健・医療・福祉に貢献する責務を有する。
4. 専門職としての自律を保つための役割・責務助産師は、自律性のある専門活動を維持し向上させるために、専門職能団体を組織し社会的な活動を行う責務をもつ。かつ、自ら研鑽し助産師としての資質を高める責任を有する。そのためには、助産領域の研究に参画し、活動領域を超えて、助産師間や、ケア対象者、医師、他の専門職との相互交流を通じて、助産ケアの改革や質の向上を目指す。さらに、後輩助産師の育成に努める責務をもつ。

公益社団法人 日本助産師会 ホームページ掲載内容(2022年11月現在)より表2の作成  
<https://www.midwife.or.jp/midowife/competency.html>(参照2022年11月24日)

**II いのちの誕生と生命の意味について****1. いのちの誕生**

ひんやりとする錦秋の夜空に光る星を眺めている。地球上に生命が誕生し進化し、ひとつの生命から人類をはじめとする生物が産まれるに至った想像もつかない時間をあらためて想う。折しも、2022年11月8日20時30分すぎ、家路に向かう路で赤道色の月とこの月の陰に隠れる青い惑星、「皆既食中の天王星食」に出会う。日本では1580年7月の土星食以来442年ぶりの現象である。この事実には驚嘆しながら、138億年前に産まれた宇宙、46億年前に産まれた地球、37億年前、原始海で誕生した生命を想う。農耕革命（食物栽培や動物の家畜化）をはじめとする人類の文明らしきものが産まれたのは1万年ほど前とされている。この気の遠くなるような時間を振り返る時、あらためて生命の基本単位は細胞であり、その延長線上に約60兆個の細胞を持つ人間が生きているという事実に出会う。

この細胞一つひとつの中心には、遺伝子という

長さ約2メートルの暗号テープが存在し、この中にはミトコンドリアという独自の遺伝子を持つ微生物が共生、酸化エネルギーを供給するという重要な役割を果たしている。この細胞の内に在るミトコンドリアは、すべて「母」由来が定説である。精子と卵子が受精のとき、尻尾の部分にミトコンドリアDNAを持つ精子は尻尾がプツンと切れる或いは溶けるという自食作用が起こる。そして母親由来のみ、次世代へと受け継がれる。父親由来のミトコンドリアは受精のときに壊されてしまい子孫には父親の核のDNAだけしか伝わらない。人の精子が卵子を目指して競うように進むことや、自食作用が起こることは映像化されている。この卵子を目指す活動にエネルギーが必要となり、そのエネルギーをつくりだしていくのが精子の生殖細胞に含まれるミトコンドリアで、卵子にたどり着いて受精の頃には尻尾の部分にあるミトコンドリアは消耗していると考えられている。

何故、母親由来のミトコンドリアが生き残るのか。そして人間の喜怒哀楽も包含する生命現象に



おける生命にどのような意味があるのか。人間に探ることを求めているように思える。もしかしたらこれは遺伝子の意志ではないだろうかと思える。科学的に説明できる現象と説明できない現象をひきつれながら生命誕生37億年の歴史を、遺伝子を継承し、母親の子宮内で生きて胎児となりこの世に産まれて新生児となる。この生命は、木綿糸1本が通る穴ほどの大きさの受精卵というひとつの細胞からはじまり分裂を繰り返す。1個が2個になり2個が4個になる。46回分裂すると70兆個以上になるとされている。人間の細胞は約60兆個という定説が限りなく真実に近いとするならば46回以上は分裂していないことになる。人間は、実に微細で微妙で精妙なくみと、そのしくみの変化によって存在している。いのちの誕生や生命現象についての説明は可能であるが、何故、その現象が起こるのか、この問いの応えは、宇宙のように果てしなく深く広い多次元的な課題のように思われる。そして、それは心を澄ませ感応力を鋭敏にする人の路であるのかも知れない。

## 2. 生命の意味

生命の語源は「いきのうち」だという説がある。人は胎児から新生児になるとき「おぎゃー」と啼いて呼吸する。「産まれいき(生)る」は「いき(息)」をすることで生命を保ち生存し人としての活動をはじめ。この生命の在り様について日本語では、生命・生活・生涯の3語で示しているが、英語ではlifeの1語で示している。日本には、いのち(生命)ととき(時)とま(間)を大切にする文化的伝統があり、生命の意味については国の様々な文化的な背景も大きく影響する。一様に人類の思想の歩みから考えると、まず人の認知構造となるイメージをとおして事物の本来の姿を示そうとする神話がある。次に概念を培って価値や倫理を問題にして生命を評価する方法を示そうとする哲学がある。そして生命という現象を記述や分析によって解明し、新しい現象を産み出そうとする医学や理学、工学という自然科学がある。現代の自然科学、特に生命科学による人間の生命の操作可能性の拡大においては、人間の生命の遺伝子レベルの在り方を検討するところまで迫られている。人間の生命は複雑な概念である。その概念の内容は単なる自然現象ではなく、変動する現代社会におけるという社会的な脈絡で解釈される意味複合体でもある。

人間の生命の意味について問う術として、例えば神話からヒントを得て哲学的、自然科学的に考え、新しい何かを創出できたら、また神話にたしかえり哲学的、自然科学的に考えるという起点を繰り返す循環の生成が、自然現象と科学的現象の生命に対峙する人類の課題のように思われる。

これら複雑多岐に渡る生命現象の諸相について、同じように生命という用語を用いたとしても、その生命の意味を問うとき、自然科学的か、哲学的か、芸術的・宗教的か、そしてどの次元で問うのか難解である。安平公夫(1992)監修、生命の意味Ⅰ<sup>6)</sup>では、生命の諸相について『生命は一様に存在するものではなく、いくつかの層があり、そこには、深味がある。用いられることばや区分の仕方は、分析をする人によって多少こととなる。しかし、生の現実にはいくつかの相があることが指摘されている。一つの考えは、科学的に測定し、把握することのできる「実体」としての生命、第二には、哲学的な意味を検討するときに用いられる「生」としての生命、さらに、第三の相として、芸術的、宗教的「いのち」としての生命』とされている。

一つの見解ではあるが、一人の助産師として、人間の生命の意味に対峙するとき、本書に記述されている三つの諸相はどこから探っても、例えば科学的から探っても哲学的、芸術的・宗教的に辿り着くように思われる。これら三つの諸相は連動し誰人も意識するとしなないに関係なく自然に「産まれ生きる術」としての相互浸透行為という現象が起こっているように思われる。人間の生命は受精からはじまり産まれ生きる過程において、生物学的、心理学的、文化・社会学的、そして「心を感じこたえること」と説明される感応という霊的な魂のような統合体として、本論の問いである「感応力」を持つ存在として、生きているように思われる。

いずれにしても、人間の存在は有限な一つの生命として独自の存在であり、一回限りの「いのちの実体」であり、この実体は霊的な魂のような個々人の価値観と生きる哲学を包含していることに生命の意味があるのではと考える。本論の課題に繋げて考えると、助産師のコア・コンピテンシーの1つ＜倫理的感応力＞とは、助産師を選択した人倫のみちであり、助産師としての「いのちの実体」

その責務において、霊的な魂をもって心に感じ応える力といえるのかも知れない。次に、人間の誕生に携わる助産師のなりわいについて述べる。

### Ⅲ 人間の誕生に携わる助産師のなりわいについて

#### 1. 産婆からの始まり

今から300年余り前の江戸中期、賀川玄悦が著した『産論』（1765年）で「産婆」の用語が初めて使われ、助産師は「産婆」という名称で職業としての一般化に繋がった。その業務の関係法規が初めて公布されたのは1868(明治元)年の太政官布達である。また産科医師として賀川玄悦が有名となったが、助産学概論(2022)では<sup>7)</sup>『学説を重要視する医師に反し、実地を重んじる取上婆は産婦や民衆から根強い信頼を得て、職業として確立していった。このころより、取上婆から産婆という言葉が書物に散見されるようになる』と記述されている(基礎助産学「助産学概論」医学書院p157)。当時の産婆の様子は、学説ではないが川柳<sup>8) 9) 10)</sup>として伝えられている。例えば「大名を胴切りにする子安婆」子安婆とは産婆の事。産婆が大名行列の途中を横切る様をみて、大名を胴体で真っ二つに斬ったかのように皮肉った川柳。また「先供を婆が割って静かなり」先供とは大名行列の先頭を歩く供(藩士)の事。婆は産婆(取上婆)の事で、産婆が行列の先頭に割って入るようなかたちで横切っても、当たり前なので先供は何事も無かったかのように静かにしている様子から、産婆が大名行列を横切る事は庶民から見れば痛快であったようである。いずれにしても産婆は大名行列を横切っても良かったようである。江戸時代のお産は座った姿勢で出産する座産が大半で、産婦の体に負担がかからないよう肘掛け付きの座椅子のような道具に座らせての出産のため、産婆が出動するときは、助手がこの座椅子のような道具を担いでいたので、周囲の人は一目で産婆とわかったと伝えられている。産婆は、新しい生命誕生にたずさわって、新しい生産力を生み出すための職業としてお産に向かう際だけの特権だったようである。

助産師の起源となる産婆は、職業としての身分が確立され、1899(明治32)年「産婆規則」が公布され、同年に出された「産婆試験規則」や「産婆

名簿登録規則」によって、産婆の資格、試験、名簿登録と、業務範囲、違反の際の罰則が規定されている。この「産婆」という名称は、1947(昭和22)年の産婆規則の改正まで用いられてきた。その後、1942(昭和17)年「国民医療法」の制定の際に、公的にはじめて産婆ではなく「助産婦」の名称が使用され、1947(昭和22)年の産婆規則はその内容を継続し「助産婦規則」と名称のみ変更されている。そして1948(昭和23)年「保健婦助産婦看護婦法」が公布され、助産婦は保健婦とともに看護婦の資格を有することが条件となった。

2022年11月、錦秋の冷たい大気が流れる今日この頃、当時の産婆・助産婦はどのような思いでこの現実に対峙したのだろうとふと想う。

折しも男女共同参画社会の実現に向けた様々な政策が進んでいた今から22年前の2000(平成12)年11月、「男性に助産師への道を開くかどうか」という議論が起こった。そして議員立法によって『婦』は『師』へと名称が改正された「保健師助産師看護師法」が、臨時国会に提出された。男性に助産師資格をとるという議論は、助産師間、専門家間、マスコミ等々で賛否両論あったが、助産師資格は女性に限るという今日に至っている。「保健師助産師看護師法60年史」(2022)によれば<sup>11)</sup>「助産師資格を男子に開放すべきという要望がきっかけとなり、性別によって専門職の資格名称が異なる職種は看護職だけであったこと、また男女共同参画社会の推進という時代の流れもあり、専門職にふさわしい名称として保健師、助産師、看護師に改正している」とある(基礎助産学「助産学概論」医学書院p159, p162, p165)。

2000年11月当時、私は22歳で助産婦になって23年目になった助産師、そして教員になって19年目だった。男女共同参画社会という政策のもとで異議を唱えなくてはならないことは何か、学生たちに熱く語っていた。生命誕生の主体は産む力と産まれる力が結実する「出産」であり、助産師は「助産」をなりわいとする職業である。只今のところ、男性の精子と女性の卵子が受精し女性の子宮で胎児期の「いのち」が育ち、妊娠期・分娩期を経て新生児として女性から産まれてくる。万が一、この生命現象が360度転換するようなこと、男性の体内で胎児期を育ち男性から新生児が産まれてくるというようなことが起こったら、私の今日の考

えは変わる。何故なら、主体は「産む」という出産であり、出産と助産は人と人との関係性によって成立していることから、男女が共に出産が可能になれば、男性の助産師も自然のことに熱く語るだろうと想う。

## 2. 助産とは

基本文書 ICM(International Confederation of Midwives) 助産の定義 Definition of Midwifery では、『助産は、助産師の専門業務であり、助産師だけが助産を実践する。知識と技術と専門職としての態度からなる独自の体系を有する。この体系は、科学や社会学など他の医療専門職と共有する学問分野から導かれているが、自律性、パートナーシップ、倫理、説明責任という助産専門職の枠組みの中で、助産師によって実践されるものである。助産は、女性とその新生児のケアに対するアプローチであり、これを通じて助産師は以下を行う。・出産と生後早期の新生児の正常な生物的・心理的・社会的・文化的プロセスを最適化すること。・女性一人一人の状況と意見を尊重し、女性とのパートナーシップの中で活動すること。・女性が自らとその家族のためにケアを行う個人的能力を高めること。・女性一人一人のニーズを満たす全人的な（ホリスティックな）ケアを提供するため、必要に応じて他の助産師や他の医療専門職と協力すること。助産ケアは、自律的な助産師によって提供される。助産の実践能力（知識、技術、態度）は、「ICM 助産教育の世界基準」を満たす助産師の基礎教育を通じて教育された助産師が身に付け、実践するものである。』とされている（2017年 トロント評議会にて採択 公益社団法人日本看護協会、公益社団法人日本助産師会、一般社団法人日本助産学会 訳）。

日本において(2022)助産は<sup>12)</sup>、『主要な2つの援助活動を通して、家庭の幸福・国家の安寧・人類の繁栄に寄与する。①助産は母子とその家族に対する生理的・身体的側面および社会的・文化的・発達の側面を重視した支援を通して、親子・家族関係のよりよい形成や発達を促し、次世代の健全な育成に寄与する。出産は家族を形成する第一歩であり、出産とそれに続く育児は夫婦関係、家族関係、子どもの健全な育成を規定するといっても過言ではない。助産は人生の第一歩を直接支え、その後の家族のあり方に大きな影響をあたえる。

②助産は女性の生涯を通しての性や生殖に関わる健康生活の援助に独自の機能を果たし、女性と家族の健康生活の質的向上に寄与する。生態系における種族保存は、すべての生物にとって最も重要なことである。助産は、女性の心身の発達・ライフサイクルに合わせた女性の生殖システムおよび機能と活動過程のすべての側面において、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態を維持するための支援活動を行い、人間としての生き方に深く関与し、女性とその家族の健康生活の向上に寄与する』（基礎助産学 I 助産学概論,医学書院p13）としている。

今から2400年ほど前、助産師を母に持つギリシャの哲学者ソクラテス(470～399BC)は『精神の産婆術(maieutice)』という言葉を用いて本当の知というものは自ら陣痛して産み出すもので、その陣痛へと高まらせ出産へと導くのが精神の産婆としての役目であるといっている。つまり、彼は学習を出産に教育を助産にたとえ、自分から答えを出すのではなく、相手が精神をめざめられるように導いたのである。この考え方は、ソクラテスの教育的姿勢として、無知の知という理論に基づき「産婆術」という方法としてプラトンが後述したものである。村井(1977)は<sup>13)</sup>『学習を出産に喩え、教育を助産になぞらえており、助産術という言葉を使っている』としている。山口(1991)は<sup>14)</sup>『ソクラテスの問答のやり方は、プラトンの作品＜テアイテトス＞の中で登場人物ソクラテスによって産婆術(助産術)と呼ばれている。これは彼の母親の職業と同じ技術だとされ、実際の産婆の仕事と彼の問答との比較がなされている。この解釈において、心魂(精神)のお産を見とるのであって、身体のお産ではないとすることや、出産とは自分のうちから知恵を発見して生み出すこと。＜産婆術＞として説明されることがある』としている。助産術は対話術とも言っており魂を持つ人それぞれに、それぞれが自らの力で課題を達成できるように対話する。この対話方法が産婦の出産を助ける助産における主軸ではないかと考える。

1980年代、松村(1993)の助産314例の記録内容の中にプロセスレコードが210枚あった。分娩第1期を中心とした産婦と助産婦の人間関係に焦点を当て、フランクフル・ゴープル著、小口忠彦監訳(1979)「マズローの心理学」<sup>16)</sup>、石塚幸雄著(1986)



「自己実現の方法」<sup>17)</sup>、ヒルデガード・E・ペプロウ著、稲田八重子他訳(1980)「人間関係の看護論」<sup>18)</sup>に基づいて分析した。そしてソクラテスのいわれた相手が精神をめざめられるように導くということはどういうことなのか、産婦が自分の力に気がつき真にめざめた状態でよりよい出産が出来るためにはどのような関わりが大切か、また、その関わりがめざすものは何か、振り返り考えた書き物<sup>15)</sup>がある。

助産婦になって1年7か月目、助産165例目「自分の力で赤ちゃんを産む」という気持ちに産婦さんがなれるようにする事の大切さが実感できるようになっていた。しかし、どのように関わっていったらよいのかわからないで固まっている私に「産婦は陣痛がこんなに強くなってきたのにどうして産ませてくれんの、産ませてくれんのやったらもう帰る」とベッドから何度も降りて帰ろうとした。大学病院では、37歳初産婦というリスクから、万が一、異常に移行したときの対策として血管確保の点滴輸液をしていたが「これも抜いて」と訴え続け状況は緊迫していた。何回かの押し問答の後、私は強気になってしまい「うん、帰ってもええよ、産むのは○○さんやから」と売り言葉に買い言葉で怒っていた。言ってしまった後ではっと我に返ったとき、内心ビクビクし動揺しパニックに陥り、次の言葉が見つからず、ただただ黙って産婦が痛いという腰をさすっていた。

この間合い沈黙は、ふっと看護学生の実習のとき受け持った硬膜外血腫術後の74歳の患者さんが「尿の管を抜いてほしい」と訴え続けた場面を思い出した。この患者さんは、退院前日になって「あんたには迷惑かけたなあ、尿の管を抜いてくれて、抜いたら尿が出んようになるとわかったけど、抜きとうて抜きとうて、けどあんたも若いのに頑固やった。学生さんやから抜いてくれるかもわからん思うたのになあ」と話してくれたことを思い出した。この時、もしかしたら、この産婦さんも帰ってもどうしようもないとわかっているけれど「帰りたい」と訴えているのではと考えた。そして産婦の言動だけで「産む気がない」と決めつけて良いのだろうか。産む気を持っているけれども弱音を吐いている場合があるかもしれない。という思いに変わっていった。この時から少しずつ、産婦さんが今どうしてほしいのか、真剣

に考えられるようになっていた。産婦が陣痛で苦しい時に私も苦しかった。それは、どのように関わったらよいかという悩みであり、産婦の苦しみと異質のものであるが、いずれにしても苦しみと共に在り、陣痛発作を乗り越え、胎児に酸素を運ぶその呼吸と一緒にいき腰部をマッサージし、産婦と共にそこにいたということ、同じ時間と空間と苦しいという思いを分かち合ったということは、どのように関わるかということにおいて考え、その術を探る大きなヒントがあったように思える。産婦が自らの「産む気」を牽きだすことができていたと振り返られたのは、出産1年後に産婦の自信に満ちた表情に溢れる自尊心に出会ったとき、そのときの対話においてである。「私頑張ったわよね。あの時、あなたに帰ってもいいと言われても帰らなかったし、あなたと一緒に良かったわ」。1歳の乳児を抱っこして誇らしげに語り笑う彼女に相槌をうちながら、私は産婦が自ら「産む気」になった出産によって、自らの内に秘めている生命力を信じ何事も頑張れると実感できたとき、生きる源泉となり、自己実現をめざしていくことに繋がるのではないかと。という確信に近い考えを持った。それは1年前にそういう助産ができたというのではなく、助産という助産師のなりわいが出産の陰に隠れあるいは薄れ忘れられたとしても○○という助産師は出産に汲み込まれて存在し、私が産んだという実体験からの思いが個々人の全身全霊に満ちた時、子育てや毎日の生活、1年後10年後の生涯に渡っての自尊心の維持に繋がるという考えである。

かつて20歳の時、看護教員になりたいと思ったきっかけは、ある脳神経外科の教授が授業で「教えるということは、例えば、とても喉が渇いているけど元気な旅人がいたとしたら飲み水があるところを教える。そうすると旅人は歩いて行き水を飲む。旅人は自ら歩き自ら飲んだと思う。教えられたことは忘れ去られていい。教えられたと思ってほしいと思わなくていい」と話されたことである。ソクラテスの問答法『精神の産婆術(maieutice)』は、学習を出産に教育を助産にたとえ、自分から答えを出すのではなく、相手が精神をめざめられるように導く、その先にある現象では学習が、出産が、主体でありつづけることと考える。

助産とは、産婦の主体的な産む生命力と胎児が産まれてくる生命力を最大限に発揮できるように、神業のような未知の力を安全・安心・安楽に牽きだすことと考える。この牽きだす現象には、産婦と胎児・新生児と助産師の巧みなハーモニーが鍵となる。阿吽の呼吸が生じてくる産婦と助産師の人間関係において喜怒哀楽の相互浸透行為を織りなす出産と助産の力動的な共生である。例えば、演劇における主役が「出産」、傍役が「助産」

という共生のような対人関係が必須のように考える。そして助産師もまた主体的に生きている人間であるのかどうか、一人ひとり一つひとつの出産を丁寧に振り返り自己洞察し、助産する智と技と心を研鑽し鍛錬し続ける助産師の生きる姿勢、心魂(精神)と対峙する姿勢が必須のように考える。次に、助産師の項・コンピテンシー＜倫理的感能力＞新たな問いのはじまりについて述べる。

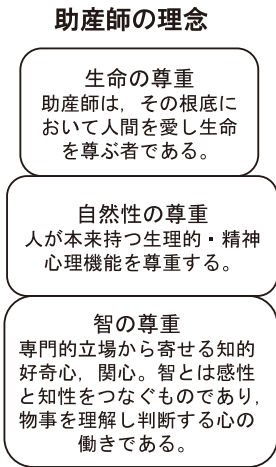


図1 助産師の理念

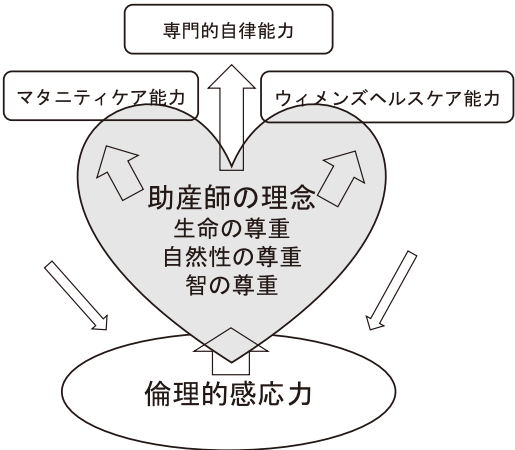


図2 助産師のコア・コンピテンシー(イメージ図)

表3 (試行案) 助産師のコア・コンピテンシー＜倫理的感応力＞分娩第1期～第4期の10事例における自己評価到達度表 関西看護医療大学大学院看護学研究科＜高度実践助産師養成コース＞

評価項目		事例 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
I 倫理的感応力												
知る	1. 妊産褥婦が気にしている思いについて知ることができる											
	2.											
	3.											
共にいる	4. 妊産褥婦にとって負担にならない距離感を知ることができる											
	5.											
	6. 妊産褥婦と感情を共有する話し合いができる											
誰にかける行為か	7.											
	8.											
	9. 妊産褥婦の苦しみ等を和らげようとする話し合いができる											
力能を保持する	10. 妊産褥婦の尊厳を気遣う言動でケアできる											
	11.											
	12.											
信念を維持する	13. 妊産褥婦と家族に安心できる情報を提供できる											
	14.											
	15.											
信頼を維持する	16. 妊産褥婦の感情を予測し思いやりの言動で相対できる											
	17.											
	18. 妊産褥婦が自尊心を維持できるようなケアができる											
信頼を維持する	19.											
	20.											

(自己評価基準・3=自らの判断で実践できる 2=助言を得て実践できる 1=手助けを得て実践できる 0=実践できない)

IV 助産師のコア・コンピテンシー＜倫理的感応力＞新たな問いのはじまり

助産師の理念を図1、助産師のコア・コンピテ

ンシーを図2に示した。＜倫理的感応力＞は助産師の理念の基盤となりマタニティケア能力、ウィメンズヘルスケア能力、専門的自律能力に大きく



影響する要素といえる。この助産師のコア・コンピテンシーについて<sup>19)</sup>、『2006年、日本助産師会は、すべての助産師が広く社会の要請に応じてその職責を十分に果たしていくことができるように、助産師の定義、助産師の3つの理念（生命・自然性・智の尊重）、助産師の倫理綱領を記した「助産師の声明」を公表した。そして、これを基礎、根拠とし、2009年に日本の助産師に求められる必須の実践能力である「助産師のコア・コンピテンシー」を示した。なお、2019年にICMの「助産実践に必須のコンピテンシー」が改訂されたこと、公表から15年が経過していることを受け、2021年に改訂版を公表している。』（助産師業務要覧基礎編、日本看護協会出版会 p54）。助産師のコア・コンピテンシーの1つ＜倫理的感応力＞についての解説<sup>19)</sup>では、「対象となる人々の行為や言動の意味を心に感じ、倫理的に応答する能力、『倫理的に応答する』とは、対象とかかわる中で援助を必要とするニーズを見極め、対象と情報を共有しながら対象にとってより善い選択ができるように支援していくこと」とされている（公益社団法人 日本助産師会 助産師のコア・コンピテンシー 2021）。

この助産師に求められる実践能力＜倫理的感応力＞は、（ケアリングの姿勢）と付して5つの要素で構成され、①知ること（妊産褥婦・家族と同じように出来事を理解しようと努力する）、②共にいること（妊産褥婦・家族にとって精神的に存在し続ける）、③誰かのために行うこと（自分にするように、出来る限り他の人に何かをする）、④可能にする力を持つこと（人生の移行期や未知の出来事を対象者が楽に通っていけるようにする）、⑤信念を維持すること（意味あることとして将来に目を向けさせるために、対象者が出来事を終わらせたり、移行したりする能力を信じる）とする一般目標を設定している。これらの一般目標それぞれに、例えば「対象者を理解するとき前提や先入観で見ないようにする」等、計25項目の行動目標を設定している。そしてレベル新人、レベルⅠ～レベルⅣと助産師のキャリア発達段階に対応した評価時期が明記され、対象へのケアについて事例を具体的に思い浮かべながら、助産師としての姿勢を自己評価できる（ケアリング実践のための自己課題を明確にできる）としている（公益社団

法人 日本看護協会 新卒助産師研修ガイドp38、助産実践能力習熟段階[クリニカルラダー]活用ガイド2022,p26)。

今日、日本で働く助産師は、職能団体の日本助産師会、日本看護協会や、学術団体の日本助産学会、教育機関の全国助産師教育協議会、いずれかの団体に所属しており、全国津々浦々において助産師のコア・コンピテンシーの1つ＜倫理的感応力＞は、殆どすべての助産師に、本論において前述した内容は知られており、全国的に標準化された用語として解釈されている。これらの内容は、2009年以降、助産師教育課程における学修内容となった。

特に 2020(令和2)年カリキュラムの第6次改正で、助産師教育の技術項目と卒業時の到達度が新設された。今後、助産師に求められる必須の助産実践能力習熟の基礎を学び基盤を形成する助産師教育課程において、どのような観点からどのような水準で＜倫理的感応力＞が修得できているのか、学修過程の可視化に向けて教育課程を構築する課題があると考ええる。

そこでこの度、本学では2022年度の助産学実習における分娩第1期から第4期における助産師のコア・コンピテンシー＜倫理的感応力＞の自己評価到達度表を試行案として作成し、学生が1例ごとに自己評価し到達度の向上を目指して活用できるように提示してみた。現段階では試行案のため表4に示したように、「知る」1. 妊産褥婦が気にしている思いについて知ることができる。「共にいる」4. 妊産褥婦にとって負担にならない距離感を知ることができる。「誰かの為に行う」9. 妊産褥婦の苦しみ等を和らげようとする話し合いができる。「可能にする力を持つ」16. 妊産褥婦の感情を予測し思いやりの言動で相対できる。「信念を維持する」18. 妊産褥婦が自尊心を維持できるようなケアができる等の20項目を設定した。そして、自己評価基準は、3＝自らの判断で実践できる。2＝助言を得て実践できる。1＝手助けを得て実践できる。0＝実践できないとし、1例毎の教員との振り返り面談で客観的評価の指標として用い学修課題の明確化に繋げていきたいと考えている。

ここで新たな一つの問いのはじまりについて述べておきたい。それは＜倫理的感応力＞に付され

た(ケアリングの姿勢)このケアリングとはである。西田(2018)は<sup>20)</sup>『看護における＜ケアリング＞は、看護師としてどう生きるべきか、そのためにはどうあるべきか、看護師は患者にとって一体どのような存在なのかということ自問し続けることや、他者にどのような自分として向き合うのかを考え続けることでしか育成できないものであると考える。＜ケアリング＞を教えることは難しく、＜ケアリング＞を教育することができるのかという疑問があるのも事実である』と述べている。

助産師になって45年目、教員になって41年目の今日、西田が述べている『自問し続けること、どのような自分として向き合うのかを考え続けること』を大切に、「出産」と「助産」で生じる相互浸透行為の術についての新たな問いを続けていきたいと強く思う。人は誰も日々の一つひとつの出来事や物事のすべてに感応すること、そこに自らの道を切り開く術があり、その道が自らを真に生かし切っていくということかもしれない。松村(2014)の書き物<sup>21)</sup>『新人助産師では、深夜の静寂をつんざくように産声を元気にあげて誕生した新生児の表情に、人間存在の真の意味を問いかねられることがあるという。人は誰人も、受胎し誕生した時から死に至るまでの生涯の時間、死に律せられている生を、一回限りの生の時を、誰人とも異なったかけがえのない60兆の細胞が精妙なしくみを持つ存在として生きている。「いのち」の時間をどのように生きられるか。その実体自らの存在価値をどのようにして見だすか。しなやかな脳と心で凜として生きる。時々刻々と異なる自分を感じて、日々の努力を積み重ねながら前向きに生きることを自らに問いかねながら』幾つになっても問い続けてばかりいる自分に会う。

司馬遼太郎(2003)の歴史小説「峠」<sup>4)</sup>において『だから心をつねに曇らさずに保っておくと、物事がよくみえる。心を澄ませ感応力を鋭敏にする道である』という文脈がある。それは胎児から新生児に誕生の瞬間に、生命が自然に孕んでいる澄んだ感応力に幾度も幾度も出会う助産師の生涯において＜倫理的感応力＞を実践すること。助産実践そのものが自然であることに依拠する本質的な生き方であるのかも知れないと思う。だからこそ学問があると思う。それは思うだけではなく、それを如何に実践するかが本物の学問である。生き

ること、助産師としてのなりわいを自らに問う学びの問いこそが真の人間の生きる道かもしれないと思う。ソクラテスの『精神の産婆術(maieutice)』という教育的姿勢は、助産学生の学修を出産に、教育を助産にたとえ、助産学生が精神をめざめられるように導くこと、本当の知というものは自ら産み出すもので、その産む気を高まらせ出産へと導くことが、助産師の資格を持つ精神の産婆としての助産学教員が担うなりわいかもしれないと思う。

## V 利益相反

本稿において開示すべき利益相反はありません。

## 謝辞

本誌に、拙稿掲載の機会をご提案くださいました本学紀要編集委員長の下舞紀美代教授ならびに関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

## 【文献】

- 1) 公益社団法人日本助産師会：助産師のコア・コンピテンシー2021.東京  
<https://www.midwife.or.jp/midowife/competency.html>(参照2022年11月24日)
- 2) 公益社団法人日本看護協会 新卒助産師研修ガイド(2012).p38.  
公益社団法人日本看護協会 助産実践能力習熟段階[クリニカルラダー]活用ガイド(2022).p36. 東京
- 3) 新村 出編(2018).広辞苑第七版,岩波書店.東京
- 4) 司馬遼太郎(2003).峠上巻,新潮文庫,p309.東京
- 5) プリタニカ国際大百科事典小項目事典.プリタニカ・ジャパン.(参照2022年11月16日)
- 6) 安平公夫監修,竹中正夫他編(1992).生命の意味Ⅰ,思文閣出版.p228.京都
- 7) 我部山キヨ子他編(2022).基礎助産学[1]助産学概論,医学書院.p157.東京
- 8) 久保成子(1981).生まれ出づること.助産婦雑誌,Vol.35 No.1.医学書院.p47.東京
- 9) 葉久真理(2006).助産師教育の現状と将来展望.四国医誌.62巻5.6号.211-218.
- 10) LINE NEWS

<https://news.line.me/detail/oa-japaaan/889518453148>(参照2022年11月24日)

- 11) 我部山キヨ子他編(2022).基礎助産学[1]助産学概論,医学書院.p159.p162.p165.東京
- 12) 我部山キヨ子他編(2022).基礎助産学[1]助産学概論,医学書院.p13.東京
- 13) 村井 実(1977).ソクラテス(下),講談社.p71.東京
- 14) 山口義久(1991).ソクラテスと産婆術:「ソクラテス問題」への一視点,大阪公立大学リポジトリ.人文学論集.1991,9・10,p59-75.大阪
- 15) 松村恵子(1993).分娩第一期を中心とした産婦と助産婦の人間関係—共に自己実現をめざすことができる関係について考える—,聖母女子短期大学紀要第6号,p79-88.
- 16) フランクル・ゴープル著/小口忠彦監訳(1979).マズローの心理学,産業能率大学出版部.東京
- 17) 石塚幸雄(1986).自己実現の方法,講談社
- 18) ヒルデガード・E・ペプロウ著/稲田八重子他訳(1980).人間関係の看護論,医学書院.東京
- 19) 福井トシ子編,松村恵子共同執筆(2022).助産師業務要覧 基礎編 2022年版,日本看護協会出版会,p54.東京
- 20) 西田絵美(2018).看護における＜ケアリング＞の基底原理への視座:＜ケアリング＞とは何か,日本看護倫理学会誌 VOL.10 NO.1 p14.
- 21) 松村恵子(2014).日本社会における「与謝野晶子と母性偏重を排す」今日的再考—助産師の生きがい感からの分析—,比較文化研究 No114.p267.